

## VI ナラ枯れ跡地における更新に関する研究

(実施期間:令和4年度～7年度 予算区分:県単 担当:三浦功次)

### 1 目的

県内でナラ枯れ(カシノナガキクイムシによるナラ類の集団枯損)が確認されてから約30年以上が経過し、これまでに県内広葉樹林の主要構成樹種の1つであるナラ類が集団で枯損している。そのような森林において更新が見込めなければ、土砂災害防止や水源かん養等の森林の公益的機能の低下が懸念される。しかし、本県のナラ枯れ跡地の植生を詳細に調査された事例は少なく、実態は明らかになっていない。

そこで、ナラ枯れ跡地の植生を調査・分析し、どのような状況であれば健全な森林に更新する可能性があるのか、その判定基準をまとめることを目的とする。

### 2 実施概要

#### (1)方法

試験地は、県内のナラ枯れ被害を受けてから5年以上経過した林分を対象とし、令和6年度はナラ枯れ被害木駆除が実施された大山町及び伯耆町の国有林21プロットで調査を実施した。

10m×10mの方形プロットを設置し、樹高10m以上の上層木及び樹高1.3m以上10m未満の下層木について樹種、樹高、胸高直径を記録し、林床植生についてササ・シダ類、木本類及び草本類の種名、被度、平均植生高を記録した。前述プロットの外側四隅に1m×1mの方形プロットを設置し、樹高1.3m未満の木本類の稚樹について樹種と本数を記録した。また、地形、土壌型及びシカ被害について調査した。

#### (2)結果

これまでの調査結果から次のことが明らかになった。

シカの生息密度の低い調査プロットでは林床植生の被度(最大値)が高い傾向がみられた(図1)。

下層木の高木性樹種の立木密度は、林床植生の被度(最大値)との間に負の相関があり、林床植生の被度の高い調査プロットでは下層木の高木性樹種の立木密度が低い傾向がみられた(図2)。

全ての調査プロットにおいて明らかな土壌侵食は見られなかった。

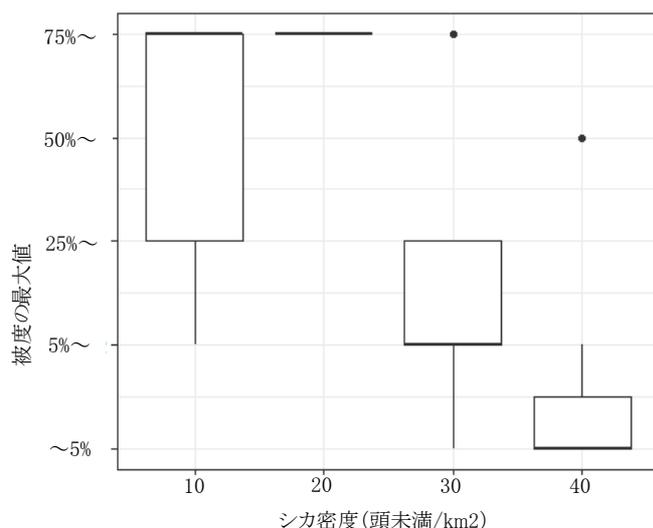


図1 調査プロット毎の林床植生の被度(最大値)

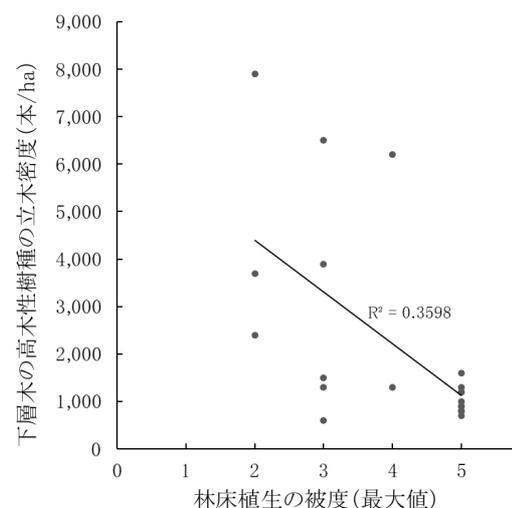


図2 林床植生の被度(最大値)と下層木の立木密度(高木性)との関係